

学生アスリートにおけるキャリア教育の一考察

～高知工科大学のアスリート教育の在り方とは～

1170463 濱崎 羅奈

高知工科大学マネジメント学部

はじめに

多くの人々にたくさんの感動と涙を与えてくれるスポーツ界だが、その表舞台の影に潜んでいるものが、アスリートたちのセカンドキャリア問題である。長い現役生活を引退し、次へのステップを決断するラインにたったアスリートたちは、なかなか次の一歩が踏み出せず悩む傾向がある。それは競技スポーツ選手である自分以外が分からず、自分自身の心の空白がありすぎることやキャリア教育のシステムづくりが充実していないということが原因となっている。

このようなキャリア問題は「プロアスリート」に限らず、「学生アスリート」にも同様にいえることではないだろうか。学生時代にスポーツを競技スポーツとして部活動やクラブに取り組む学生たちの中でその後プロアスリートとして生活をする選手はほんの一握りであり、ほとんどの選手はいずれスポーツへの比重を軽くせざるを得ない時を迎える。その際に自分の“中核”でもあったスポーツの変わりの新しい何かを見つける難しさという問題が生じる。

アスリートのキャリア問題について先陣を切り、対策を講じたのは2002年のJリーグが始まりだった。Jリーグは「セカンドキャリアサポートセンター」（2013年3月廃止）を設立し、引退後の選手のケアに努めた。このことをきっかけに、プロ野球をはじめ、日本のスポーツ界で選手の引退後の人生についての問題意識が高まった（斉藤寿子、2015）。その後、様々な形でのプロのアスリートのキャリア教育、キャリア支援が実施されることとなった。しかし、学生アスリートたちにおけるキャリア教育、支援はいまだ私たちの身近には存在していないことが実状である。プロアスリートはスポーツを行う人たちの中でも限られた選手であり、ほとんどの人々はそれ以外であるにも関わらず、なぜ対策はされていないのか。また、あるとしてもなぜ周知されていないのだろうか。

私自身、14年間一つのスポーツを継続し、今年度「引退」、「就職活動」を迎え、これまでの経験がどのように生きるのだろうかと考える機会があった。そこで現役中のより早い段階でこの「考える機会」に出会うことができているならば、また違ったスポーツ選手としての価値観をもち、また違った現在もあったのかもしれないという思いに至った。このような経験があったこともまた、本研究を進める際の原動力となった。

以下、第一章ではこれまでに行われてきた、あるいは行われているプロアスリート、学生アスリートのキャリア教育・支援についての考察を行う。次いで第二章では、高知工科大学の学生や教員を主に対象として行ったアンケート調査とヒアリング調査をもとに、高知工科大学のアスリート教育についての現状と問題点を整理する。その際、早い段階で学生アスリートに対し、何らかのキャリア教育が求められることを踏まえた上での仮定とする。そして第三章では、高知工科大学のアスリート教育とはどうあるべきなのか、求められる取り組みについて提案する。最終的には高知工科大学の学生アスリート教育にとって最も大切なことは何かを紐解くことを本研究の目的とする。

第一章 既存のアスリート教育・支援の現況

第一節 スポーツ庁設立

「スポーツで“稼ぐ”」ということを根底に据え、2015年10月に設立されたのがスポーツ庁である。2016年8月に「大学スポーツの振興に関する検討会」での中間とりまとめでは、大学横断的かつ競技横断的統括組織（＝日本版NCAA）の設置の方向性というこれまでの日本にはなかった取り組みへの挑戦が公表された。そのために必要とされる“大学スポーツ振興のための7つのテーマ”として打ち立てられたことが以下

の7つの項目である。1. 大学トップ層の理解の醸成 2. スポーツマネジメント人材育成・部局の設置 3. 大学スポーツ振興の資金調達力の向上 4. スポーツ教育研究の充実や小中高校への学生派遣 5. 学生アスリートのデュアルキャリア支援 6. スポーツボランティアの育成 7. 大学スポーツ資源を活用した地域貢献・経済活性化。

この中の一つであるスポーツ庁が打ち出す「学生アスリートのデュアルキャリア支援」について着目したい。学生アスリートにとって大学時代は競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身に付け、人間形成を図るうえでも重要な時期と言える。そのため、大学は学生が学業に励みながらスポーツでも活躍するための修学上の配慮をすると同時に、将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出すことが重要であるとされている（文部科学省、2016）。大学で行うスポーツは、スポーツ選手であると共に学生でもあることが前提にあり、勉学とスポーツの両立のバランスをどのようにとるのかということが重要とされていることが分かる。

現状の修学上の配慮として、公式試合や遠征等で授業を欠席した時の配慮や、練習時間に配慮した授業の時間割編成、運動部活動生向けのクラス編成、個別支援等の学内制度上の柔軟性を持って学生アスリートを支援している大学もある（全国大学体育連合、2015）。このように“修学上の配慮”と唱えられている取り組みは、未来長き学生アスリートたちにどのような影響を与えているのか。スポーツ庁という一つの大きな組織が形成され、今後日本の777校の大学において、具体的にどのような方法で修学上の配慮を行うのか、またどのようにキャリア形成支援に取り組んでいくのかということに注目が集まるのではないだろうか。

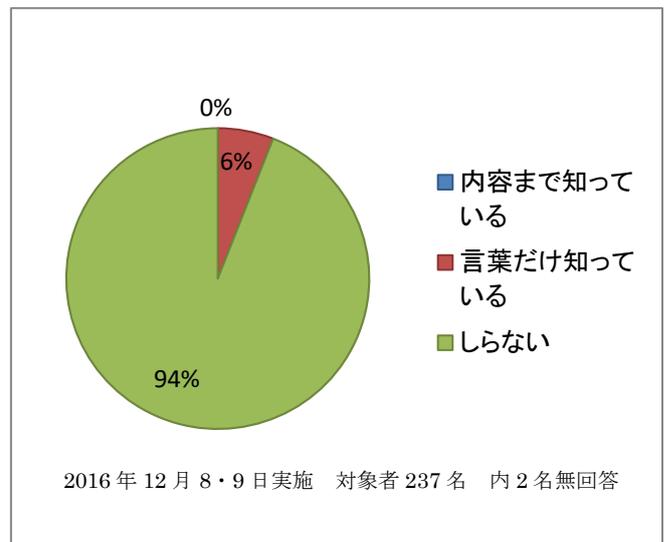
第二節 WHO（＝世界保健機関）によるプログラム

学生を対象とした教育・支援について代表的なものにWHO（＝世界保健機関）が行う、「ライフスキル教育プログラム」が挙げられる。ライフスキルとは、日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力であると定義されているものである。この必要な能力とは、1. 意思決定 2. 問題解決 3. 創造的思考 4. 批判的思考 5. 効果的コミュニケーション 6. 対人関係スキル

7. 自己意識 8. 共感性 9. 情動への対処 10. ストレスへの対処と分類されており、学生のより早い段階でこれらについての知識を学校で学び、取り組みを行う必要があると言われている。また、多くの子どもたちとの接点があり、経験値の高い教師の存在、地域が抱く信頼性やプログラムの継続性から考え、学校はライフスキル教育を行うのに最も適した場所であるといえる。

この取り組みは世界中のさまざまな国の教育機関で行われている。具体的な取り組み内容としては、教師が知識を与え、学生が情報を受け取るというような、よく学校で見受けられる受動的学習とは異なり、ブレインストーミング、グループディスカッション、ディベート、ゲーム、ロールプレイなど参加型学習・主体的、経験的指導法を用いるものである。このような授業学校のカリキュラムに組み込んでいくことで学生のうちからライフスキルを身近に感じさせていくというものである。しかし、国によって解釈の仕方が少しずつ違っていることや、プログラムを執り行うまでのプログラム開発に2年から4年の時間が必要だということ、指導者の不足といった問題もあり、あまり世間に知られていないのが実状である（WHO、1997）。実際に高知工科大学の学生237名を対象に行ったアンケート調査の質問事項の一つとして「あなたはライフスキル教育について知っていますか。」という問いに対して以下の結果がでた。

グラフ 1. ライフスキル教育の認知度



回答者235名の内、内容まで知っていると回答した学生は0%、言葉だけ知っていると回答した学生が6%（14名）、その他の

94% (221名) が知らないという回答結果だった。このことからライフスキル教育の認知度の低さを知ることができる。

第三節 プロアスリートのキャリア教育・支援

国内のスポーツ統括組織である国内競技連盟、中央競技団体(=NF)ではプロアスリートにスポットを当て、セカンドキャリア支援に向けた取り組みが行われている。この取り組みについて筑波大学院人間総合学科研究代表吉田章と研究員である平田しのぶが、トップアスリートのセカンドキャリア支援に向けた統括組織の実態調査の研究を行っている。この研究は2007年以降5年間に渡り中央競技団体に所属する指定強化選手に対してのセカンドキャリア支援をどのように成熟、発展させてきたのかを調査し、将来に向けて具体的かつ実践的な方法について検討することを目的としたものである。この研究内容を大きくまとめると以下ようになる。

結論から先に述べると、中央競技団体に加盟している団体の中でもキャリア支援を実施する団体は年々増加してきているが、十分なキャリア支援体制になっていないということである。というのは、支援を行う競技団体側はアスリートのキャリア開発を個人または指導者に任せたいとしながらも、団体内におけるビジョン策定や体制整備には至っていないからである。

実際の支援内容としては、キャリア支援関連機関との連携作りや就職先の紹介、就業能力開発のための支援が主に行われており、その他にもキャリア相談窓口の設定や資格取得に関する支援というように、各団体によりさまざまな形でキャリア教育や支援に取り組んでいる。しかし、こうした取り組みを行う上で最前提に重要だとされることが、アスリート自身が自らのことを深く知り、自分の可能性を大きく持つことである。さらに、選手自身が自己理解を深めた時に、「これから何を大切に生きていくのか」ということを競技団体側が理解し、個々の希望を把握しながら、「個別に」柔軟な対応ができることが望ましいとされている。今後の中央競技団体に求められることの中に、セカンドキャリア支援のビジョンを明確にするということ、そして競技団体側が予算面を含め、支援スキルを得ることが述べられている。

これは国をあげて行う政策だが、まだまだ発展途上な部分も多く見受けられる。しかし、中央競技団体に加盟している

団体のキャリア支援実例が上昇していることは良い点であり、今後キャリア支援の質を高めていくことでより、意味を成すものになる政策の1つである。

実際にプロアスリートたちのセカンドキャリアを支える企業の1つである株式会社山愛で日々、現役を引退した選手のキャリア問題解決について努めている藤井頼子氏にヒアリング調査を行った。山愛ではプロを引退したサッカー選手を主に、相談にきた元プロ選手一人ひとりに対し、新たな一歩を踏み出す勇気を与える仕事を行っている。「スポーツしかしてきていない」とスポーツに打ち込んできたことをネガティブに捉える選手が多い中、スポーツをしてきて何を得たのか、何を活かすのかを考える時間を共有する。そして新しい就職先の開拓、就職後の動向も知ることで、これから引退を控えるプロ選手たちへの安心にも繋がっている。また、プロアスリートは技術面もレベルが高く、スポーツに費やしてきた時間自体も長いことや“仕事”でもあったスポーツを失う時の喪失感はより強いものであるとも言える。藤井氏によると、相談にくる選手の中には、「プロを引退する今まで自身のキャリアについて全く何も考えてこなかった」という人も多いと言う。ヒアリング調査を行った当日にも新しい依頼者からの問い合わせがあり、実際に山愛のようなセカンドキャリアサポートセンターを必要としている選手たちが存在していることが分かり、一般企業としてのキャリア支援の必要性を感じた。

第四節 大学のキャリア教育・支援

実際に、教育現場でも部活動に取り組む学生アスリートたちに対するキャリア教育を行っている大学がある。今回はその中でも二つの大学の取り組みを紹介する。

まず、早稲田大学では早稲田大学競技スポーツセンターが置かれ、2014年から“早稲田アスリートプログラム(=WAP)”が執り行われている。このWAPは「スポーツの価値は - スポーツに限らないでしょうが - 最終的にはそれをする人間の価値に依存する」(川口前所長)ということを皮切りに、早稲田大学の創設150年を見据え、あるべき姿を策定した際に作られた“早稲田スポーツの新たな展開”プロジェクトの一つである。早稲田スポーツの価値を最大化するという目標を柱とし、早稲田スポーツの歴史を学ぶことからアスリート

の生活管理といった幅広い分野からの取り組みを行っている。その中に、『キャリア形成』についての項目がある。ここでは、競技を引退した選手が希望するキャリアには指導者が多いと考えられていることから、指導者についての知識を学ぶことや、人生設計を考える機会が与えられること、体育各部員を対象とした就職活動支援のイベントを実施している。これらの取り組みを行うことにより、早稲田スポーツを担う一学生としての必要な知識や自覚、キャリア形成について学ぶ場を与えている。早稲田大学は“早稲田スポーツ”というブランドを重視していることに加え、運動部活動生一人ひとりに強い自覚を持たせることにより、早稲田大学でスポーツを行うことを推奨していることが分かる。現在社会人として生活している早稲田大学で部活動に所属していた元選手たち数名の体験談の中には、早稲田スポーツを通じて得た、精神力、仲間との絆、決断力といったたくさんの経験と思い出が現在の自身を支えているという意見があららこちらに見られた。ここで考えたことが試合の実績ではなく、目には見えないものが社会にでもなお、残っているということである。

二つ目は2007年に創設された環太平洋大学である。環太平洋大学では、“教育と体育の融合”を軸として始まった、『大学＝スポーツ』のような大学である。印象的なことは「他の大学と違うのは、『スポーツは教育の最たるものだ』という伝え方をしている点です」と語った環太平洋大学理事長大橋博の言葉である。体育会五訓と呼ばれている、礼節・克己・信頼・前進・感謝を通し、生き方そのものを示し唱えるだけでなく、日常生活の中で実践するように指導している。同時に力を入れている取り組みが、学生アスリートたちのセカンドキャリア支援として教員を推薦していることである。その背景として、近年では新しい教員が入っても長くは続かない人が多い現状を踏まえ、学力面だけでなく、体育会で厳しい環境においても耐えてきた経験を持つ人材が必要であるという考え方がある(事業構想大学院大学出版部、2016)。

早稲田大学と環太平洋大学の取り組みから、大学生は教育課程内の中でも最も社会に近い立場であることが認識され、その分キャリアについてのプログラムも積極的に進められている。その際両大学共に重視していることに、社会に出て通じる人間力という目には見えないものを育てることと、キ

ャリア設計として教員やそのスポーツの指導者を推薦しているということが言える。

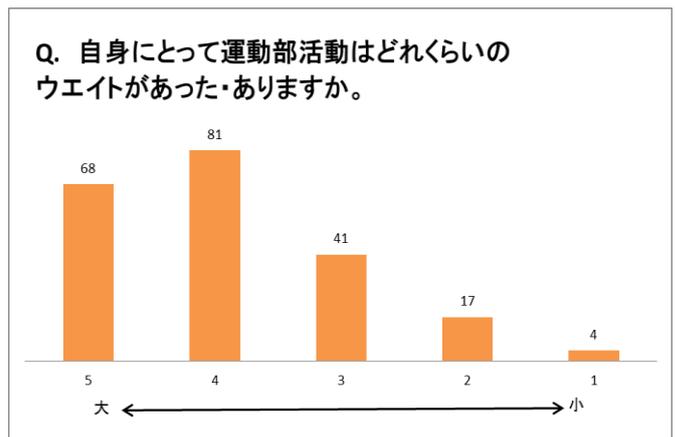
以上のように第一章では既存のプロや学生アスリートに対するキャリア教育・支援について紹介した。次の第二章では、これらの取り組みを踏まえ、私自身が最も身近な高知工科大学との違いはどこにあるのか、どのような現状があるのかということに着眼点を変えて論じていく。

第二章 高知工科大学の現状調査

第一節 アンケート調査結果

高知工科大学における運動部活動・クラブについての現状を探るべく、高知工科大学経済・マネジメント学群の学生237名を対象にアンケート調査を実施した。内訳は、これまでに運動部活動・クラブへの所属経験がある人：211名、ない人：25名、不明：1であった。本研究では運動部活動・クラブへの所属経験があり、学生アスリートであったまたは現在も学生アスリートである学生に焦点を当てて述べていく。以下がその結果をまとめたものである。

グラフ2. スポーツの比重



過去、運動部活動・クラブへの所属経験があった221名の学生たちのスポーツへの時間的・体力的ウエイトはどれくらいなのかを調査したところ、85%以上の学生にとって5段階の評価のうち3以上のウエイトを感じているという結果がでた。この結果より、学生にとって運動部活動やクラブといったスポーツへの比重を重く捉えている人が圧倒的に多いことが分かる。重ければ重いほど、手放すときの減量感は強く大きくなることが予想される。さらに、スポーツに重きを置くという面では、運動部活動・クラブ経験者の221名の中でスポーツ推薦制度を利用し、学校に入学した経験がある人、ま

たは自身はスポーツ推薦制度を利用していないが、スポーツ推薦制度を導入している運動部活動に所属したことがある人（以下：スポーツ推薦関連の学生）は102名であった。約半数の学生がこれまでに何らかの形でスポーツ推薦制度に関わりがあることが分かった。以下の『グラフ3. 「キャリア」についての不安』を見てもわかるように211名の運動部活動・クラブ経験者の中で93名（44%）がキャリアについて何らかの不安を感じており、さらにその93名中75名（81%）がスポーツ推薦関連の学生という結果が出た。

グラフ3. 「キャリア」についての不安の有無

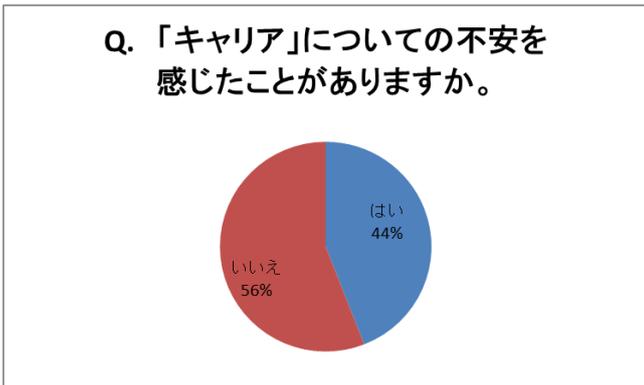
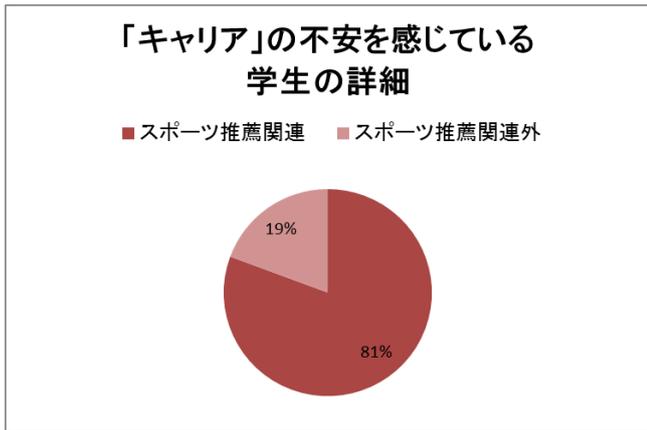


図1. 「キャリア」について不安をもつ学生の内訳



学生アスリートたちが感じている「キャリア」についての不安とは具体的はどういった内容なのかを以下にまとめた。

表1. 「キャリア」における不安の具体的内容

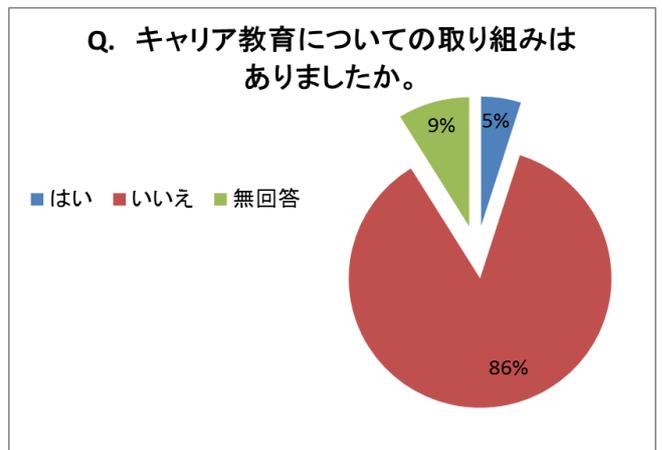
(選択型複数回答可)

具体的内容	数
スポーツばかりしていいのかという葛藤	58
どういった進学・就職選択をすればいいのか分からない	50
スポーツがこれからの自分自身に役立つのか分からない	36
金銭面の悩み	11
その他	6

その他には「スポーツ以外での時間をもっと必要と思っても難しい」、「結果（競技実績）で進学先が変わる」、「人が勉強している間に部活動をしていてみんなのように進路の目標が叶うのか」、「就職活動、研究に取り組もうとする中で、スポーツとの両立ができるか不安」という意見があがった。

このように多くの不安を抱えている学生アスリートの中でも81%を占めるスポーツ推薦関連の学生が所属する運動部活動・クラブでは不安を解消すべく何らかのキャリア教育は行われているのかということ、グラフ4のようにそうとは言いきれないのが現状である。

グラフ4. キャリア教育についての取り組み



スポーツ推薦制度を導入している部活動・クラブは導入していない部活動・クラブよりも、求められる技術面やその競技の専門性が高い分、費やす時間も長い。必然的に選手自身のスポーツの比重は大きくなり、「キャリア」についての不安を抱える学生が多いのにもかかわらず、キャリア教育についての取り組みがあったのはたった5%（5件）だった（はい：

5名、いいえ：88名、無回答：9名)。5件の具体的内容としては、資格取得、部活動のOB・OGの講演会、キャリアについて考える授業という意見がでた。実際に「学生アスリートたち自身がキャリアについて考えていく上であったらよいと思う取り組み、プログラムは何ですか」という問いに対しては次のような回答があった。

- ・スポーツ経験者との交流、飾らない体験談
(部活動のOB・OG、社会人1年目の人、元プロアスリート等)
- ・現在同じ立場の人との意見交換
- ・自分のキャリアについて考える授業の開講
- ・職業体験
- ・〇〇教室のように小学生などに指導する機会
(技術向上と指導者になることで見えてくるものがある)
- ・資格取得
- ・スポーツによる戦績だけでなく、日頃の取り組みが評価されるプログラム
- ・スポーツの結果を残した人が自己の希望で進学・就職できる制度
- ・職場にスポーツ枠
- ・人間性を高める取り組み(礼儀・マナー・常識など)

このように様々な取り組みが求められていることが分かったのであるが、これらの取り組みは実際に行われていない、もしくは行われていても数少ない教育機関内であることが言える。さらに「学生たちにとってスポーツに取り組む中で、進学や就職に活かせるもの、活かしたいと思うものは何ですか」という問いに対しては、ほとんどの学生がコミュニケーション力、忍耐力、責任感、達成感、礼儀やマナー、リーダーシップ、ポジティブシンキングというように、精神的な面を捉えている回答が多く、目に見えないものが自身のキャリアについて関わっていると考えている傾向があることが明らかとなった。今後学生アスリートたちに取り入れるべきキャリア教育・支援として、先述の学生アスリート自身が求める取り組みと今後活かしたいものを関連させながら考える必要がある。

第二節 ヒアリング調査結果

アンケート調査の内容をさらに深めるため、A0入試で入学してスポーツに励む学生アスリート2名から、より具体的な話を聞くためヒアリング調査を行った。以下が実際の質問内容をその回答である。

質問1. 「なぜA0入試制度を利用して本大学に入学しようと思ったのですか。」

A. B. 「自身の得意分野であるスポーツを使うことができたから。」

質問2. 「現在の学生生活はどのようなものですか。また率直に現状に対してどのように感じていますか。」

A. 「部活動ばかりしていて大学で何を学んでいるのか分からない。」

B. 「部活動中心の生活になっている現状がある。スポーツを活かし入学してきたからやらないといけないことは当たり前だと思っているが、実際に何を学んでいるのかと聞かれると分からない。」

質問3. 「運動部活動と勉強の両立で悩むことはあった・ありますか。」

A. 「あった。勉強したくても部活動の疲れがたまってできない。休憩時間がない。」

B. 「ないとは言えないが部活動がないから勉強するかと言うとそうではないと思う。」

質問4. 「あなたが現在所属している部活動において“キャリア”について何か取り組みはあった・ありますか。」

A. B. 「ない。」

質問5. 「自身のキャリアについて考える上で運動部活動内や大学側に求める取り組みや思いはありますか。」

A. 「他学群だと学んでいることに特徴があるが、マネジメント学部はそうではない。大学側に求めたいこととして、A0入試のスポーツマネジメントに所属しているからといって特別な授業がないように感じるから推奨ではなく必修授業を作ってほしい。スポーツマネジメントをより専門的に学ぶことで自信や就職活動の切り口にしたい。」

B. 「スポーツを使っただけの就職選択のしかたについての種類を詳しく知りたい。卒業生の中でもスポーツに携わる仕事に就かれている人は少ないように感じ、自分が励むスポーツをど

のように活かすことができるのかをより早い段階で知ることができたら嬉しい。」

質問6. 「もしも運動部活動ごともしくは運動部活動への所属学生対象でキャリアについての情報交換をするようなプログラムを組むとしたらどのように考えますか。」

A. 「それぞれの部活動で競技内の実力の差があり、練習時間や監督の考え方も異なるため、考え方や意識にも差があるのではないかと。」

B. 「他の部活動の学生との情報共有があれば刺激になる。自身の気付きにもなる。ただ、各部活動ごとの違いを知った上で楽な方へ走りたいという気持ちに流されないよう、全体がアップするようなプログラムの必要性を感じる。」

質問7. 「専門の授業を開講することに関してはどのように考えますか。」

A. B. 「聞くだけの授業ではなく実践的な授業であれば受けたいと考える。」

このヒアリング調査結果より、スポーツに励む学生はスポーツという自身の個性をより引き伸ばし特徴とさせたいと考えていることが分かる。そのためにスポーツマネジメント専攻であれば必修の授業を明確にすることに加え、参加型・体験型授業が求められる。参加型・体験型授業とは具体的にフィールドワークを中心とした実際にスポーツに関係する企業や人物を知り、実際に自分の目で見て感じさせ学ぶ機会を与えるものである。

続いて本学学生に加え、大学側つまり教員側の視点についての意見も知るべく、本学の中村直人教授（専門：教育学）と前田和範助教（専門：スポーツマネジメント）の2人から話を伺った。2人のヒアリングにおいて大学スポーツの重要な共通点として「文武両道」という言葉があがった。さらにその根底に覗かせた「客観性」という観点に着目したい。「文武両道とは基本スポーツをしている学生に対し言える言葉であり、“文”のところに重きを置く。“文”の中にはコミュニケーション力、社会人基礎力、いかに自分を客観的に見られるかということも含まれると思う。」（前田）「この大学の学生は自分の能力を見限っている人が多い。センター試験が思うようにいかず目標の大学を諦め入学してきたという学生も多く見受けられる。その悔しさや失望感を今なおひきずっており、自分に自信がないと感じている学生たちはもったいない。

とくに教職課程においても教員免許はとるが、採用試験は自分には難しすぎるからと言い、諦め挑戦しない学生たち。スポーツをしている学生たちにも同じようなことが言えるのではないかと。だからA0入試や特別推薦制度といったシステムの問題ではない。本学生であることには何も違いはなく、自身の思いの強さと自己分析による客観性をもつことができれば、一人一人の可能性はより広がる。」（中村）このことから本学の学生アスリートに求めている部分に、自己分析を行い、客観性を持つことが重要であることがわかった。

さらに両先生に高知工科大学に今後必要であるキャリア教育とは何かという質問を投げかけたところ、次のような返答があった。「本学の全体的なシステム上のキャリア教育としては企業についてのキャリア教育は手厚いと思う。就職支援課をはじめとし、学生支援課や教育講師といったさまざまなところからの情報提供や支援がある。しかし、教職課程と公務員に対してのキャリア教育・支援はまだまだ整っていないと言えないのが現状である。スポーツマネジメント専門の前田先生もこられたので、スポーツに取り組む学生たちへのフォローができるような方策を進めていただくこともできると思う。具体的には、前田研究室の学生を中心に学生アスリートとしての思考回路を各部に浸透させる方法や、スポーツ専門のセミナーを行うこともできるのではないかと。その中で一人ひとりが自身にとってのスポーツの位置づけについて考えることができればいい。」（中村）「まずは大学側、生徒側相互にキャリア教育の流れが社会にあることを理解させることが必要ではないかと。不可能を無視して言えば、アスレティックデパートメントのような運動部活動を統括する組織を作り、アメリカのように成績がよくないと運動部活動への参加ができないような制度を導入することも求められる。しかし現実的にはまだ無理があるため、情報が共有できるようなホームページを作成することや、学生アスリート自身が自発的に動くことを促す授業を通し、スポーツがプラスになるような考え方を教える機会を作るべきである。」（前田）

以上の内容からも理解できるように、高知工科大学でスポーツを志す学生たちのフォローは十分とは言えるものではなく、今後学生アスリートに特化した取り組みの必要性が大きくあることが分かる。

第三節 問題提起

これまでの調査から浮き彫りになる高知工科大学の学生アスリート（運動部活動への所属経験者）における三つの問題点を挙げる。

①運動部活動所属経験のある学生の中で自身のキャリアについて不安を感じたことがあるのはスポーツ推薦関連の学生が多い。

→スポーツ推薦制度を導入している部活動の大部分は、競技の専門性が高く実績を強く求めるため、練習時間が長いことや、運動部活動への重心が大きい。そのためスポーツ以外のことに取り組む時間や機会が少ないことからスポーツから離れる時期がきたときにキャリアについて不安を感じる学生が多い。

②自身のキャリアについて不安を感じるスポーツ推薦関連の学生（75名）のうち、キャリア教育・支援を行う教育機関（5件）が少ない。

→運動部活動に日々励む学生たちの多くがキャリアについての不安を抱えているということは教育機関内である学校は少なからずその対策を講じるべきであるのにも関わらず、その不安を軽減、解消するようなキャリア教育、支援を行う事例が少なすぎるということは解決すべき課題である。学生たちの不安の声を学校側が把握する機会をもつこともまた、一つの課題である。

③学生アスリート一人ひとりが自分にとってのスポーツの位置づけ・意味付けを理解することができていない。

→学生アスリートたちが自身のキャリアについて考える際に、スポーツを日々取り組んできた自分をマイナスに捉えている。株式会社山愛の藤井頼子氏へのヒアリングの中で、プロアスリートを引退した選手たちはまず「スポーツしかしてきていないから」という話を伺うということに加え、学生アスリートたちの抱えるキャリアの不安の内容としても“スポーツばかりしていていいのかという葛藤”という意見が最も多かった。過去を見返し新たな一步を踏み出すキャリア選択の場において、自身の多くの思いと時間をかけ、日々励んできたスポーツを本人がマイナス面として捉えることは、過去の自分を否定することになる。つまり、アスリートであった自分を自身により、真の無駄と化してしまうということである。スポーツをしてきた自分を否定的に捉える原因としては、ス

ポーツに励むメリットの部分への意識が足りないこと、自己分析が不十分であること、自分にとってのスポーツの位置づけが理解できていないことがあげられる。

第三章 高知工科大学のアスリート教育とは

第一節 スポーツ推薦制度の背景

そもそも高知工科大学の特別推薦制度いわゆるスポーツ推薦入試に加え、A0入試にはどのような背景や目的があり、開始されたのか。始まりは2009年度の入試から導入された特別推薦制度＝スポーツ推薦入試である。この制度は大学入試センター試験への参加、自己アピール、スポーツ活動、課外活動等を評価するというものであり、学生の多様化を目的として始まった。

追うようにして導入された入試制度が、マネジメント学部での2013年度開始のA0入試である。内容としては数理マネジメントプログラム、国際マネジメントプログラム、スポーツマネジメントプログラムの3つから成り立っており、マネジメント学部が唱える「さまざまな分野におけるマネジメント能力を有する人材を育成する」という目標を具現化する意味でもあった。これは大学の入試制度における新たな一步でもあるものである。中でも本研究ではスポーツが常に片割れとなるスポーツマネジメントプログラムについて取り上げる。当プログラムでは大学のスポーツ活動で高度な成績を修めつつ、マネジメントの専門意識を習得することで、スポーツビジネスの分野で求められるマネジメントスキルを身につけることを学ぶ意義、将来の展望としている。さらに学生に求める人物像としては大学スポーツ分野で高度な業績を修めつつ、マネジメントの専門知識を活かして、将来スポーツマネジメント領域で活躍しようとする文武両道を旨としている者である（本学パンフレットおよびA0入試「学生募集要項」）。このようにスポーツマネジメントプログラム以外の2つのプログラムも何か特別にぬきこんでいる学生に対し、より個性を尊重しながら、他の学生との共存を行うことにより、新たな刺激を与え、大学をより魅力的な場へとすることがA0入試制度の背景としてある。本学教授中村直人によると「制度導入開始から2017年度で4年目を迎える現段階ではこの制度の必要性については判断し難い側面もあり、今後10年ほどの経過を

経て、評価した上での再編が求められる。」と語られており、制度としての革新の必要性についてはこれから先の話となる。

第二節 本学で求められるアスリートキャリア教育

私が本研究で高知工科大学の学生アスリートにおけるキャリア問題を軽減・解決するための必要な取り組みについて提案したい、高知工科大学ならではの取り組み内容は以下の内容である。

(1) 授業でのキャリア教育

スポーツに日々の大部分を費やし励んでいる学生にとって、大学で競技力以外に何を学んだのかということを実感させるために必要なことが、授業の中で専門性が高い授業を必修科目とすることである。

現在スポーツマネジメントプログラム専攻の学生に推奨しているスポーツ関係の授業はさまざまであるが、そういった授業を必修にし、4年間を通して専門的に学び続けることによって自分が大学にきてスポーツ自体も取り組んでいるがスポーツマネジメントを確かに学んだと言える制度体制が求められるのではないだろうか。もちろん本学の学生の多様性を重視するため、スポーツマネジメントプログラム以外の学生の履修もできるようにする。しかし、第一章第一節でもあったようにスポーツ庁の7つの挑戦の中の学生アスリートのデュアルキャリア支援で考えられているような練習時間に配慮した時間割編成や運動部活動生向けのクラス編成といった取り組みは、高知工科大学の学生の多様性を曇らせてしまう可能性がある。

そこで私が提案したい具体的な授業内容は、参加型・体験型の授業である。WHOのライフスキル教育でも重要視されている、聞いて学ぶ受け身の授業ではなく、学生自身が足を運ぶことや語り合うことで学ぶ授業である。本学はスポーツ推薦制度を行う目的の一つとしてスポーツビジネスの分野で活躍する学生の輩出がある。スポーツビジネスの選択肢を広げるためにも、授業の一環としてスポーツに関連する現場を知ることによってスポーツの活かす方法を学ぶ。実際に授業の中でフィールドワークとしてスポーツ関連企業に出向き、どのような仕事やどういった心を持ち仕事をしているのかということやさまざまなケーススタディを通じ実際の目で見て、学生自身が感じる事が大切である。実業団や指導者など自分の競

技力を強みとしたキャリア選択をしている人やスポーツメーカーといった目に見えるスポーツへの関わり方以外にも、スポーツで培ったメンタル的な部分を活かしキャリア選択を行った人もいる。そのようなさまざまな形態でスポーツに関わる経験者に会うことができるものを目指したい。そのことがきっかけにもなり得る、決断にもなり得る、そういった学生にとって貴重な経験なものとなることが期待できる。また、現在も「スポーツ企業マネジメント」という科目内でも行っているような企業側に来ていただき情報提供を行う授業もまた継続して行っていくべきである。その際にもやはり受け身だけではなく、来ていただいたスポーツ企業の方との会話を持つ時間を与えることで、他人事ではなく自分事に学生自身がしていくことが出来ることが求められる。授業でスポーツの何か一部分でも自身のキャリアに活かすことができることを学生に気付かせることにより、学生の態度の変化となり、これからの仕組みとなるのではないだろうか。

(2) 運動部活動でのキャリア教育

次に、大学スポーツで何をしたいのか、これからの自分に何を活かせるものとするのかを見つけるためのキャリア教育を、所属する運動部活動で行うことを提案する。まず一つにより早い段階で自身のキャリアについての意識づけを行うために、スポーツ推薦制度での入学者に授業の初めにガイダンスを行う。1年の初めにキャリアについて話しても意味がないという反論もあると思うが、1年生のうちからどのような意識をもち、これからの大学生活の中でスポーツと勉学の文武両道に励んでいきたいのか、どのような過ごし方があるのかを伝え、意識させるだけでも学生にとっての大学スポーツの意味を考えるきっかけになる。

次に、現在高知工科大学では競技ごとの部活動が1年生から4年生と顧問の先生もしくは監督といった縦の結びつきにより構成されている。それに加え、各部活動同士の繋がりをもつこと、大学との繋がりを作り、横の結びつきを作る。運動部活動の一環として、自分にとってのスポーツとは何か、何のために日々の練習に取り組んでいるのか、近い目的から遠くの目標設定を行い、個人個人のスポーツの意味を明確にすることが必要である。これらのことを考える機会を作り、同じ部活動内だけではなく他の競技スポーツに励む学生たち同士で共有し、情報交換をすることで気付きになり、多くの

人と関わり考える機会になる。さらに前述した授業で行うキャリア教育について、大学側が顧問や監督に理解を与えることにより授業で学ぶスポーツマネジメントが活かされ、大学と運動部活動の結びつきがより濃いものとなる。さらに運動部活動ごとでスポーツボランティアとして地域スポーツとの連携を行う。地域のスポーツに携わることで、指導者としての模擬体験に近い経験ができることや、そのスポーツならではの楽しさや本質を感じることができ、自身のキャリア選択の刺激にもなる。

アンケート調査結果より、多くの学生アスリートたちがキャリアについて考えていく上であったらいいなと思う取り組みは、同じ運動部活動のOB・OGとの関わりを作ることであった。同じような経験者がどのようなキャリアを積んでいるのか、スポーツをしてきた自分の何を現在活かしているのかを語る場を顧問の先生や監督が定期的にする。さらにはいずれ授業の中でもOB・OGの参加がある科目の設定へと関連付けさせていくことも可能であるため、大切な方策の一つである。

(3) まとめ

本研究の結論を以下のようにまとめる。調査より明らかとなった問題点は、一つ目に運動部活動所属経験のある学生の中で自身のキャリアについて不安を感じたことがあるのはスポーツ推薦関連の学生が多いこと、二つ目に、自身のキャリアについて不安を感じるスポーツ推薦関連の学生（75名）のうち、キャリア教育・支援を行う教育機関（5件）が少ないということ、そして三つ目に学生アスリート一人ひとりが自分にとってのスポーツの位置づけ・意味付けを理解することができていないという三点であった。これらを軽減・解決するために下記の方策を提案する。

- ①スポーツマネジメントプログラム必修科目の設定
- ②参加型・体験型授業の開講
- ③1年生を対象にしたキャリアガイダンス
- ④大学・顧問もしくは監督・学生の横の繋がりを作る
- ⑤地域スポーツへの参加
- ⑥運動部活動ごとのOB・OGとの交流

この6点の方策から授業と運動部活動で相互に作用しあうキャリア教育を行うことで、学生アスリート一人ひとりがスポーツをする意味を客観的に理解し、キャリアとの結びつきが容易になる。大学生活の早い段階から始め、継続していく

ことで、高知工科大学における学生アスリートの問題点は改善されると考える。

おわりに

本研究のきっかけは、自分自身がこれまで長く継続してきた運動部活動を引退し、さらに就職活動に立ち止った際に、「私にとってこれまで最も中核にあったスポーツとは何だったのか。今後の自身にどのように生きるのか」という考えに至ったことである。研究を通して過去・現在のキャリア教育・支援にどのようなものがあるのかということ、高知工科大学の学生アスリートの現状や課題について考え、大いに学ぶことができた。高知工科大学内の学生アスリートの中には私と同じように悩む、悩んだ経験がある学生が大勢いることが分かり、よりキャリア教育・支援の必要性を感じている。さらにキャリアについての不安が解消されれば、現役中の競技活動に安心して集中することができるようになるのではないだろうか。

しかし、本研究で取り上げた問題点を提案する方策で改善することが本質ではない。運動部活動に励む学生アスリートたちが自己分析を行い続ける習慣を築き、最終的に自分自身の決断でキャリアを選択することが真の目的である。キャリアを決めることも自分次第、キャリアについて学ぶことも自分次第、大学スポーツに取り組むことも自分次第。だからこそ自分のスポーツとは何かということ客観視できる視点が最も重要なのである。どのような選手でもいつかは現役を引退する瞬間がくる。それゆえ、競技技術だけではなく、使用用途はさまざまにあり、形は変わりゆくものだが個人個人が持つ、変わらない“中核”を信じ持ち続けることがそのアスリートのスポーツをする意義ではないだろうか。

今後スポーツ庁による日本版NCAAや7つの挑戦がどれくらい浸透していくのかということに注目していることと共に、今後自分の後輩たちには、自分の可能性を見限らず、とことん自分のスポーツの根底にあるものへと突き進んでほしい。いつか競技アスリートから離れる瞬間に出会ったときに未来の自分にとってスポーツをしてきてよかった、これからも何らかの形で携わっていきたいと感じてほしい。この研究が高知工科大学の学生アスリートたちの安心に結びつく一ページであることを願っている。

謝辞

本研究を進めるにあたり株式会社山愛の藤井頼子氏をはじめ、本学教員中村直人教授、前田和範助教、担当教員である生島淳准教授ほか、皆様から多大なご協力をいただきました。さらに互いに励まし合った研究室の仲間たちへ向け、この場をかりて御礼申し上げます。

参考文献

- ・伊多波良雄 (2011) 「スポーツによる人材育成」, 横山勝彦ほか編『スポーツの経済と政策』晃洋書房。
- ・神谷拓 (2015) 『運動部活動における教育学入門』, 大修館書店。
- ・黒田次郎 (2010) 「スポーツ選手のセカンドキャリア問題」, 内田勇人ほか編『スポーツビジネスの動向とカラクリがよくわかる本』秀和システム。
- ・全国大学体育連合 (2015) 「スポーツ・クラブ統括組織と学修支援・キャリア支援に関する調査報告」, 『大学体育』105号。
- ・重野弘三郎 (2010) 「将来、どんな人生を歩むのか」, 高峰修 編, 『スポーツ教養入門』 岩波書店。
- ・岡達生 (2010) 「スポーツ指導者になるということ」, 高峰修 編, 『スポーツ教養入門』 岩波書店。
- ・谷塚哲 (2008) 「これからの地域スポーツクラブの形」, 『地域スポーツクラブのマネジメントークラブ設立から運営マニュアルまで』カンゼン。
- ・吉田良治 (2013) 『ライフスキル・フィットネス 自立のためのスポーツ教育』岩波書店。
- ・早稲田大学競技スポーツセンター (2016) 『早稲田アスリートプログラム 大学でスポーツをするということ』ブックウェイ。
- ・WHO (1997) 『WHO ライフスキル教育プログラム』大修館書店。
- ・事業構想大学院大学出版部 (2016) 「大学スポーツの潜在力」, 『月刊 事業構想』11月号, 28-37頁。
- ・慶應義塾大学 総合政策学部 東海林研究会 松田明奈 (2009) 『女子高校生ホッケー選手におけるライフスキルプログラム実践』。

<http://web.sfc.keio.ac.jp/~yukon/PDF/akina-matsuda->

・斉藤寿子 (2015) 『元アスリートたちが語る「引退後の実情」～第3回スポーツ・セカンドキャリア・シンポジウム』
<http://theborderless.jp/942/>

・清水聖志人 (2016) 島本好平・久木留毅・土屋裕睦 [2016] 『大学生トップアスリートの卒業後における雇用状態とライフスキルの関連 卒業後4年間に渡る銃弾調査の結果より』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/sposun/26/2/26_2_303/_pdf

・筑波大学大学院人間総合学科研究科 スポーツ健康システム・マネジメント専攻 平田しのぶ・吉田章 (2010-2012) 『トップアスリートのセカンドキャリア支援に向けたスポーツ統括組織 (NF) の実態調査』。

http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/research_reports2013/report7/#/24/

・文部科学省 (2016) 『大学スポーツの振興に関する検討会議』。

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/taoushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1375308_1.pdf

付録

ヒアリング調査

- ・調査日時…
対象者…藤井頼子 株式会社三愛
- ・調査日時…2017年1月27日
対象者…前田和範 高知工科大学助教 スポーツマネジメント専門
- ・調査日時…2017年1月31日
対象者…中村直人 高知工科大学教授 教育学専門
- ・調査日時…2017年2月1日
対象者…本学学生2名 AO入試制度による合格者1期生と3期生

アンケート調査

- ・調査日時…2016年12月8・9日
- ・対象者…マネジメント学部237名 (内5名卒業生含む)
- ・質問内容ならびに回答結果 (抜粋)

質問 1. 過去、または現在、運動部活動やスポーツクラブに所属した・している経験がありますか。

回答 はい：211 いいえ：25 無回答：1

質問 2. あなたにとっての運動部活動は、どれくらいの時間的・体力的ウエイトがあった・ありますか。

(大きい 5←4←3→2→1 小さい)

回答 5：68 4：81 3：41 2：17 1：4

質問 3. あなたが考える・思う、運動部活動のメリット(良い点)は何ですか。以下から選び○または記入してください。

(複数回答可)

回答 ①根気強くなる：153 ②進学・就職に役立つ：68
③思い出づくり：80 ④交友関係が増える：156
⑤戦績が残る：61 ⑥スポーツマンシップが獲得できる(礼儀・マナー)：147 ⑦からだづくり：136 協調性が得られる：116 ⑨その他：17

質問 4. あなたが取り組むスポーツを活かし、スポーツ推薦制度により学校に入学した経験はありますか。

回答 はい：77 いいえ：134

質問 5. 自身はスポーツ推薦制度は使っていないが、スポーツ推薦制度を導入している運動部活動に所属したことがありますか。

回答 はい：61 いいえ：144 無回答：6

質問 6. 運動部活動に熱中して取り組む中で、進路や就職などいわゆる「キャリア」についての不安を感じたことはありますか。

回答 はい：93 いいえ：118 (93名中75名がスポーツ推薦関連)

質問 7. (質問 6において はい とお答えされた方のみ)

「キャリア」についての不安とは具体的にどのような内容ですか。(複数回答可)

回答 ①スポーツばかりしていていいのかという葛藤：58
②どういった進学・就職選択をすればいいのかわからない：50
③スポーツがこれからの自分自身に役立つのか分からない：36
④金銭面の悩み：11 ⑤その他：6 (スポーツ以外での時間をもっと必要と思っても難しい・他の人(スポーツばかりしてきた人以外の人)より仕事ができない・企業が部活動以外にも求めるものがあるのではないかと就職活動、研究に取り組もうとする中でスポーツとの両立ができるか不安

・結果で進学先が変わる・人が勉強している間に部活をしていてみんなのように進路の目標が叶うのか)

質問 8. あなたは「ライフスキル教育」を知っていますか。

回答 内容まで知っている：0

言葉だけ知っている：14 知らない：221 無回答：2

問題 9. (質問 4.5 でどちらかもしくはどちらも はい とお答えされた方のみ) あなたが所属した運動部活動でキャリア教育についての取り組みはありましたか。

回答 はい：5 いいえ：88 無回答：9

質問 10. (質問 9 で はい とお答えされた方のみ) その取り組みはどのようなものでしたか。以下から選び○または記入をしてください。①キャリアについて考える授業：1
②部活動の OB・OG の講演・対談：2 ③資格取得：2

質問 11. あなたが自身のキャリアについて考えていく上で、あったらいいと思う取り組み、プログラムは何ですか。

回答 ・学外の人との接点を持つ(自分と同じようにスポーツ経験者) ・現在同じ立場にある人との意見交換 ・職業体験 ・〇〇教室のように小学生などに指導する機会
・資格取得 ・スポーツによる戦績だけでなく日頃のお取り組みが評価されるプログラム ・「今」をどう過ごすのかということが今後どのように繋がるのかなど将来のことについて考えられる授業や講演 ・社会人になって働きながらできるサークルの紹介 (以下省略)

質問 12. あなたがこれまで運動部活動やクラブでスポーツに取り組む中で、進学、就職に活かせるもの、活かしたいと思うものは何ですか。

回答 ・コミュニケーション力 ・継続力 ・礼儀・マナー ・協調性 ・リーダーシップ ・実績 ・集中力 ・勝負強さ ・やる気 ・上下関係 ・理不尽なことへの対処
・ポジティブシンキング ・部内での役職 ・壁を乗り越えた経験 ・達成感 ・たくさんの思い出を共有した仲間
の存在 ・責任感 ・観察力 (以下省略)

質問 13. 社会人になってもスポーツを継続したいと思いますか。

回答 はい：152 いいえ：73 無回答：12